

シヨヘル織機を使う小島日和さん。現在、織りは職人さんに頼んでいるが、勉強会を開くなど、技術継承にも取り組む。



ファッション

キャッチーなテキスタイルで、織物産地の明日を紡ぐ

terihaeru(テリハエル)代表 テキスタイルデザイナー / 小島日和さん

**尾州だからできること
レトロ織機が生む唯一無二**

可愛い！思わず声が上が
る。スシにケーキにチョコ。
おいしそうなモチーフは、結
構リアルだったりモフモフ
だったり。雨つぶ、波間といっ
たタイトルがつく動きのある
生地は、ストリーperを感じさ
せる。

「織物の面白さを伝えるため
に、キャッチーであることに
大事にしています。モチーフ
に選ぶのは、感覚を共有でき
る身近なものです」。そう語
るのは、愛知県一宮市を拠点
にオリジナルのテキスタイル
を発信する小島日和さん。「そ
して大前提は、尾州ならではの
ものであること。産地と
シヨヘル織機を残すための
ブランドだからです」

愛知県から岐阜県にかけて
木曾川沿いを中心に広がる日
本有数の毛織物の産地、尾州。
技術と質の高さを誇り、欧州
のトップメゾンや有名デザイ
ナーからのオーダーも絶えな
いが、時代と共に往時の勢い
は失われている。その尾州で

昭和初期から活躍してきた
がシヨヘルと呼ばれる低速
自動織機。高速織機にない、
ふっくら柔らかく立体的な手
織りの風合いを生み出すが、
いま残るのは数えるほどだ。

**大学時代の出会いから
目指すのは新時代の機屋**

名古屋芸術大学へ進学し、
2年への進級時に専門を選ぶ
際、カッコいいメディアデザ
インに憧れた。でも先生が
言った。「あなたはテキスタ
イル、織物に向いている」。
やってみたら面白かった。
大きな転機は、やはり先生
の勧めで、学生と尾州の匠を
結ぶ人材育成事業に参加した
ことだった。そこで出会った
70歳になる師匠の織物に衝撃
を受ける。世界的ブランドか
らも熱い支持を得るファン
シーツイードの匠、足立聖氏。
その生地は「もう可愛くて、
美しくて、夢中になりました」
ところが、その生地が数年
後にはできなくなる。シヨ
ヘル織機が職人の高齢化でな
くなってしまおうという。後継

者の不在。背景にあった問題
は、下請けが中心であるが故
の工賃の安さだった。そこで
考えた。「自分で企画して値
段を決められる機屋があれば、
ブランドが育ち、将来へつな
いでいけるのでは」。3年生
の時だった。

そうして誕生した「テリハ
エル」では、織物生地とそれ
を使ったプロダクトを企画・
制作。小売店やネットを介し
て販売している。企業との取
引も一部あるが、大量生産・
廃棄が当たり前になっっている
業界で、小ロットで必要な分
だけを生産するのも特徴だ。
シヨヘル織機の使い方も職
人から教わり、一時は織るの
も自分でと考え、チャレンジ
したが、「一人では無理」と
改めて気付かされた。

近年は、全国の繊維会社の
テキスタイルデザイナーや企
画担当を集めた展示会「NI
NOW(ニ・ノウ)」を企画
運営。母校での講義をはじめ
人材育成にも取り組んでいる。
「学生には言うんです。先生
の勧めは聞くようになって」と
朗らかに笑う小島さん。表情

を引き締めて言葉に継いだ。
「これからの繊維産業に求め
られるのは企画からできる人
材。産地である地方でこそ良
質で密度の高い仕事ができる
と感じています」
ワクワクするものづくりで、
尾州の、日本の繊維産地を継
承していく。そのビジョンは
周りを巻き込んで広がり、大
きなうねりを起こしている。

小島さんに サステナブルのこと、もっと聞きたい！

- Q1.** 社会的な課題を意識するようになったのはいつですか？
A. 尾州の織物を守りたいと思った時。生地を作る中で、環境への影響にも関心を持つようになりました。土に還るものなど、地球にやさしい素材も使っていきたくて考えています。
- Q2.** この仕事に就くために大学時代に学んでおきたいのは？
A. 一人でできないこの仕事は、職人さんと同じ目線に立てて伝えようとするのが重要です。素材相手なのでうまくいかないことも多く、柔軟さも求められます。そんなことを理解するためにも、色んな産地を見ておきたいと思います。



リアルな質感にもこだわったマグロやサーモンのスシなどをモチーフに使ったマスクも販売。これならつけるのが楽しくなりそう。



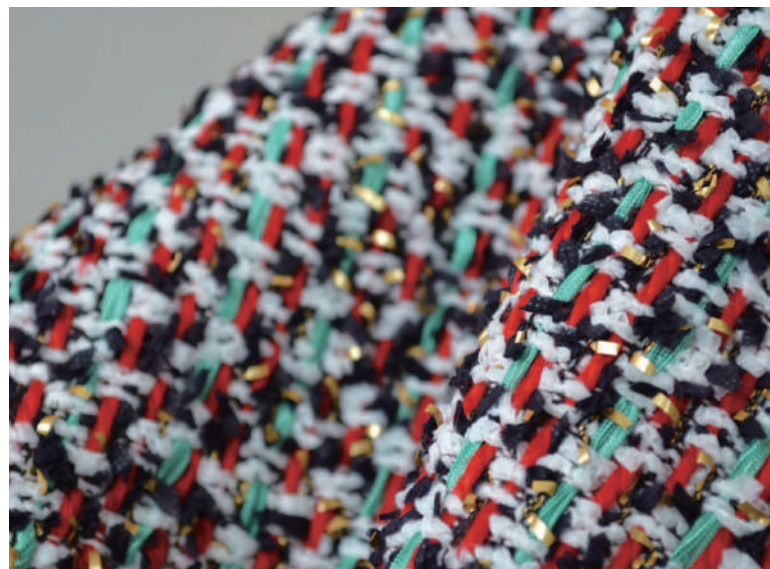
無骨な表情のシヨヘル織機。高速織機の5倍の時間をかけ、ゆっくり織り上げる。このレトロな機械でしかできないものがある。



「Ice cream」シリーズより、「chocolate mint」のポーチ。織った後にウール糸をハンドカットし、洗い上げることで、丸いポンポンになるという。

こじま・ひより

1992年愛知県生まれ。名古屋芸術大学テキスタイルデザインコース卒業。3年生の時に、一宮地場産業ファッションデザインセンターの人材育成事業で、学生のアイデアを尾州の匠がサポートするプロジェクト「翔工房」に参加したのを機に、ブランドをスタート。現在は明治創業の工場を間借りし、アトリエを構える。



紐やリボンなどを織り込むことも。みずみずしい感性から「照り・映える」美しく光り輝き、人、場所、未来を照らす布が誕生する。